



短歌集 大出雲抄



おおなみし、とう

うゑだみつお

大地震抄（おおなみしょう）

平成23年3月11日、東日本は大地震と大津波に襲われた。私はその時、病院の検査を終えてロビーに居た。テレビは、津波が陸地を、走っている車を飲み込んでいく様子を映し出し、私達は目をこらして見つめていた。「恐ろしいことが起っている」、皆、ため息をつくばかりだった。

その日以来、新聞やテレビで被災地の様子が報じられたが心が痛む話ばかりだ。その時に詠んだ短歌を紹介する。拙い歌だが形に残すことで少しでも犠牲者への供養になればと願う。なお「なる（い）」とは地震の古語。

3月13日 ラジオ報道から

流れくるアンパンマンの励ましに「ぼく、がんばる」と聞けば悲しも

3月13日 テレビ報道から

生きのびし犬が死にゆく犬（とも）のそばをはなれず座すを見れば悲しも

4月28日 新聞報道「石巻市立大川小学校合同供養式典」

模範たる六年生ゆえみつかるも最後なるかと聞けば悲しも

祭壇の一年生から教師まで笑顔の遺影見れば悲しも

4月28日 テレビ報道

「職に殉ず息子は誇り」と復興を促す老父（ちち）と知れば悲しも

4月 石原軍団、被災地を慰問

励ましにと請（こ）われて歌う「泣かないで」、歌いつつ泣くと聞けば悲しも

5月1日「題名の無い音楽会」にて佐渡裕指揮者

「音楽は無力」と嘆き「ふるさと」を歌って祈る御魂（たま）鎮めてと

5月2日 テレビ報道から

復興を祈りて踊る鹿（しし）踊り荒ぶる御魂（みたま）鎮（しず）めてよ速や

5月2日 テレビ報道から

避難所の長（おさ）にしあれば葬儀にも行けずなりきと聞けば悲しも

6月10日 新聞報道から

星となる母を訪ねて波となり連れ帰らむと聞けば悲しも

7月12日 テレビ報道から

見つからぬ娘さがしてショベルカー操（あやつ）る母と知れば悲しも

7月24日 テレビ報道から

勇み立つ駒は相馬の鎧武者（よろいむしゃ）妻恋う涙みれば悲しも

8月8日 テレビ報道から

陸奥（みちのく）の海荒ぶれど和魂（にぎたま）は七夕祭りに帰り来まさね

陸奥のけんか七夕（たなばた）泣きながらけんか相手の復興祈る

8月18日 テレビ報道から

陸奥のじょんがら念仏みはるかす廃墟に踊るを見れば悲しも

9月6日 新聞報道から

夜を徹し造れる道を救援のパン運ばると聞けば尊し

夜を徹し造れる「がれきの道」を経て救援物資のパンは届きぬ

11月7日 テレビ報道から

一物（いちぶつ）も落とすまじとてトラックの物資に腹ぼう姿尊し

平成25年11月16日 NHKが陸前高田市のその後を放映

きんもくせいの下で笑った思い出を残して町は津波に消えた

よみがえる模型の町に涙する うれしさゆえに 悲しさゆえに

ありし日を語れば落ちる涙ゆえ ありしのこと語ることなし

平成26年3月、被災地の中学校の卒業式が放映される

あの日から三年（みとせ）が過ぎぬ仮校舎 送るも涙送らるも涙

毎日新聞 9月23日(金)13時10分配信



重機を探り、行方不明の児童を捜す平塚なおみさん＝2011年9月6日、百武信幸撮影

見つからぬ娘さがしてショベルカー操（あやつ）る母と知れば悲しも

この歌はNHKの番組「震災を詠む2013」に寄せられた東日本大震災にまつわる歌の中から選ばれて、「また巡り来る花の季節は（2014年2月講談社刊）」に掲載された。

私は2011年7月のNHKのテレビ放送により、このお母さん、平塚なおみさんのことを知って歌を詠んだ。

平塚さんは大川小学校6年生だった娘の小晴さんを探すために6月に重機の免許を取得していた。捜索を続けていた9月に大川小学校から数キロ離れた海で遺体の一部が発見され、鑑定の結果小晴さんと確認された。

平塚さんは娘さんが見つかったのちも、まだ行方不明の4人の児童を探すためにショベルカーを操っていた。その様子が毎日新聞で紹介された。

2011年9月23日の毎日新聞の記事は以下のとおりである。

『東日本大震災の津波で多くの児童が流された宮城県石巻市立大川小学校から数キロ離れた海で、遺体の一部が見つかりDNA鑑定の結果、中学校教諭の平塚真一郎さん（45）と妻なおみさん（37）の長女で6年生だった小晴さん（当時12歳）と22日確認された。「せめて一部だけでもと思っていたら、本当にそうでした。それでも帰ってきてくれてうれしい」。捜索のため6月に重機の資格を取った、なおみさん。愛娘が帰ってきた今も重機を操り、なお不明の児童4人の捜索に加わる。最後の一人が見つかるまで――。

遺体が見つかったのは名振（なぶり）湾の漁港付近。地元漁師が見つけた8月9日、夫婦2人で確認に向かった。津波に流され、たどりついたのか。「へそを見れば分かる」と思っていたが、損傷は激しい。ただ、重ね着していた下着は見覚えがあった。震災当日はまだ寒かったからだ。

「小晴が、私たちが分かる形で帰ってきてくれた」と夫婦は確信した。遺体は翌日に一晩だけ帰宅、11日に火葬に付した。

正式確認に真一郎さんは「ようやく葬儀を出して、みんなの元に送ってやれる」とほっとした様子で話す。なおみさんは「他の子たちの捜索で、できることを続けます」と力を込めた。

全児童108人のうち、小晴さんを含め70人が亡くなり今も4人が行方不明の同小。震災直後は冠水し近づくことさえできなかった。水が引いてからは周辺で、他の不明児童の保護者らと土を掘り返すなどしてきた。真一郎さんが仕事に復帰後、なおみさんは6月下旬に教習所に通って重機の資格を取得。石巻市から借りた重機を他の保護者とともに操縦し、手がかりを求め地面を掘り返した。

同小に入学した長男冬真君（6）、保育所に入り言葉が増えた次女小瑛（さえ）ちゃん（2）は成長していく。その喜びをかみしめる間もなく、小晴さんが見つからない焦りが募る。お盆が近づくころの「帰宅」だった。

震災半年の今月11日。警視庁の応援部隊が引き揚げ警察の捜索態勢が縮小された。長靴姿のなおみさんは、今も帰らぬ4人の児童を思い「これからどうなるの」と大粒の涙で部隊を見送ったが、その後再び重機に乗った。

小晴さんが帰ってくるまで「ずっと見つからず、取り残されるんじゃないか」と不安だった。気遣って足を運んでくれた他の保護者への感謝が、なおみさんを突き動かす。捜索で精いっぱいな保護者に代わり「まだ探す場所はある」と捜索の継続を訴えている。【百武信幸】』

詩集「新苑」から

学生時代、正確には昭和44年、和田先輩（現在、京極流箏曲宗家）に誘われて詩集「新苑」の同人となったが、詩なぞ作ったことがなく、五、七、五、七、七と指を折りつつ作ったのが短歌とのかかわり始めだった。

昭和44年「新苑」9月号

○河口湖にて幼いところ等と

頬照らすしだれ花火のうれしさに湖（うみ）の子は火を富士にかざす

○発（た）つ朝

この次に会う日語らず我発つ朝 老いたる祖父は草刈りに行く

「また来（こ）し」と幼きいとこの見送りに

「またすぐ来るよ」の嘘もゆるせよ

○家にて

ひた走る小犬を追うて夏空の星の光に足をとどめつ

○あすは京都

明日発つと用意も終えて父母と夜食の茶づけ時かけて食う

昭和44年「新苑」10月号

本棚に見えぬ糸張る蜘蛛のおり指でそを切る風強き夜

遠き日のうら悲しさの甦（よみがえ）る 冷たき風の走る夕辺は

汝が行くはそこと急ぎぬ人波を 思い定めし五条坂かな

限りある若き日なれど誰も恨まず誰をも恋せぬ人とありたし

○大原にて

ただならぬ現身（うつしみ）なれば幸（さち）薄き運命（さだめ）秘めしごと 曼珠沙華（まんじゅしゃげ）かな

○十五夜に

白銀（しろがね）の群矢（むらや）射放つ望月に仕返しをせむ放歌高吟

昭和44年「新苑」12月号

雨に落ちる金木犀（きんもくせい）のオレンジを心にとどめ秋を暮らしつ

尾を垂るゝ食堂の野良犬（のら）は銀杏と枯葉にまぎれ小犬を産めり

○時代祭

晴れがまし祭り姿を見せたくておらずと知れどさがし歩けり

闇に溶けし柚道（そまみち）すぎて何ものにもかえがたくみる街の灯の波

苦しさに仰ぐ夜空を星一つ流る行方（ゆくえ）の遙かなるかな

明日は汝に逢う日にあれば晴か曇か夜寒（よさむ）にありて星をかぞえつ

昭和45年「新苑」3月号

○二月一日、六十人の集団自決を遂げし岐阜下呂町鳳凰開拓団へ叙勲の旨、報ぜられし日
渦なせる時代の翳（かげ）りの激しければ 黙（もだ）して逝（ゆ）きし
下呂の町びと

満州の平原（はら）を響（とよ）もす風ゆきて帰らぬ御魂（たま）は天に漂う

渺茫（びょうぼう）と広がる平原（はら）は罅（ひび）裂きて 緋の泪飲む
御魂（たま）鎮めてよ

吉田神社節分祭

終り近き祭りに屋台の赤黒き あるじは残る唐黍（とうきび）を焼く

立春

樹に繁き枯葉静もる冬一日 浮かむ雲綿輝きて流る

現なく見やる梢の夕明りに 別れし友の浮かみては消ゆ

暖かき靄にかすめる街の灯に子等の歌いゆく 明日は晴れるか

春日射す汝の黒髪なびきては吾肩に触る 風はいたずら

百済観音

信仰（いのり）持たぬ吾が眼のがれて御仏（みほとけ）の
現心（うつつこころ）はいずこにおわす

薬師三尊

御仏は若き命の護りなると仕（つか）ゆる人の言葉うれしく

サラリーマンとなってから

40年近く過ごしたサラリーマン時代の短歌は殆ど無い。喜びも悲しみも数多くあったのだが、歌は湧いてこなかった。歌うことを避けていたようにも思う。

昭和45年11月

今日よりは一人住む部屋 妻めとる友は箒（ほうき）と菓子を残して

昭和45年11月

過ぎし日に山をめぐりし友らいずこ この秋晴れに心騒ぐも

昭和63年2月

「美しき雪」と叔母上賞（め）でたる日 父の葬儀を執りおこないぬ

これ押さば父熱（あつ）からむ火葬場の重油バーナーのスイッチを押す

平成9年11月

「街道をゆく2」モンゴル紀行の少年競馬（ナーダム）を見て読める
モンゴルの平原（はら）を駆け抜け死ぬ馬は天馬となった少年よ泣くな

平成16年8月

健（すこ）やかに蛙（かわず）は鳴けり 父母の住める美空に届けその歌

平成16年8月

存分に歌い尽くして落ちる蝉 熱き歩道にポタリと響く

楽しみは 庭の隅なる沈丁花 ひそと香りて 春を知るとき

楽しみは 庭の隅なる金木犀 ひそと香りて 秋を知るとき

平成16年10月

楽しみは 春風春日に誘われて ベランダいっぱい布団干すとき

平成18年4月

父母のいませる如き春の宵 桜吹雪にわれは幼子（おさなご）

平成18年7月 還暦

十分の六か七分の六なのか還暦の身の寿命（いのち）の比率

平成22年6月

健やかに蛙は鳴けり 父母はそばにいるよと 唱うごとく